

大塚敬節
矢數道明
責任編集

世漢方医学書集成

29 華岡青洲一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第Ⅰ期・全30巻

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 29 華岡青洲(一)

第 30 Ⅰ 期
全 Ⅰ 期

昭和五十五年四月二十五日 第一刷発行
昭和六十一年八月二十五日 第二刷発行

編 者 大 塚 敬 節
矢 数 道 明

発行者 中 村 安 孝

発行所 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番代
振替口座 東京七一三五四番

製版所 株式会社 日本写真製版所

印刷所 株式会社 伊 藤 印 刷

製本所 株式会社 辻 本 製 本



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01222-1 C3347

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫



華岡青洲肖像

凡 例

一、本書第二十九卷「華岡青洲(一)」には、『外科神書』『瘍科瑣言』『燈下医談』『青洲先生治驗録』『産科瑣言』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録した。影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。但し、『外科神書』の図版は一頁に一丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等はそのままにした。

一、底本は次の通りである。

外科神書 大塚敬節所蔵写本 一冊(内題には「外科新書」とある)

瘍科瑣言 大塚敬節所蔵写本 一冊(外題には「伝書癰科瑣言」とある)

燈下医談 大塚敬節所蔵写本 二冊

青洲先生治驗録 大塚敬節所蔵写本 一冊(青囊秘録と合一冊)

産科瑣言 宗田一所蔵写本 一冊

一、解説は、宗田一（日本医史学会常任理事）が執筆した。

一、巻頭の華岡青洲肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（昭和十一年、刀江書院）によった。

華岡青洲

宗 田 一

一、はじめに

華岡青洲の生まれた紀伊国上那賀郡名手庄西野山村字平山（現・那賀町平山）は、国鉄関西本線の支線・和歌山線で紀ノ川沿いに東行し、和歌山から約二〇キロ、粉河寺縁起絵巻で有名な粉河寺のある粉河駅（こが）の次の名手駅（なて）の東北一・五キロの地にある。高野山の北麓に当たるこの地は有田とともに昔から紀州蜜柑の産地として知られる。

この平山の地に、青洲の盛名をしたって向学の医生が入門のため諸国から多数集まり、それは文字通り壱岐一カ国を除いて全国に及んでいた。また、各地から患者が殺到、青洲はこれら患者の

診療と医生の教育に尽力、華岡流外科の名を全国にとどろかせたのである。

堂号・春林軒は文化年間に旧家屋が狹隘になり新築した新屋敷に与えた名称で、その主屋は現存している。

診療患者は重症の者を除いては、いわゆる病人宿に預けた。そのような病人宿としては、快々堂と布袋屋があり、前者は医生の宿舍ともなり、まもなく春林軒表門近くにのち移転し、外塾となった。布袋屋ものち、旅宿から病人宿兼医生宿となり、新塾とよばれるようになった。こうして、医生は春林軒邸内の内塾のほかには右の外塾・新塾に分居、それでも間に合わぬときは周辺の民家に下宿させるといふ盛況さであったが、この盛況は青洲が積極的に入門の勧誘を全国的にしていたことが手紙から知れる。

のち、平山の春林軒のほかに、和歌山城下に診療分室を、また大坂に分塾を設けた。前者は青洲が紀州藩に召され、いわゆる勝手勤めを許されたとき、出仕の都合上設置したもので、その開設年月ははっきりしないが、はじめ南休賀町、のち次男の修平（鷺洲、四代随軒）が常駐するようになつて、三木橋南詰に移転している。後者は、末弟の良平（文献・鹿城）が青洲のすすめで堺に出て小林寺町、のち文化十三年（一八一六）、大坂に移り中之島に居を定め、堂号を合水堂と名づけた。紀州・春林軒塾に入門のつもりで来た諸国の医生のうち、大坂に足をとどめて合水堂に入塾する者も出て、兄の青洲に負けないほどの名声を博し、当時の人びとは「北岡（合水堂）、

南岡（春林軒）に譲らず」と評判した。

このように盛名を博した華岡青洲には刊行された医書は一冊もなく、多数の著作は治験記録の一部を除き、すべて門弟の口述筆記か編纂になるものばかりで、これは合水堂の鹿城についても同様である。

ところで、華岡青洲の伝記としては、古典的名著の呉秀三『華岡青洲先生及其外科』（大正十二年、吐鳳堂）があり、戦後には二つの著書、森慶三ら『医聖華岡青洲』（昭和三十九年、同顕彰会）、藤本篤・大久保萬知子『華岡青洲』（昭和四十七年、那賀町華岡青洲をたたえる会）のほか数点のパンフレットが出ており、また呉の著書も復刻（昭和四十六年、思文閣出版）されたので入手し易くなった。

従って伝記の詳細はここでは略し重要事項のみを解説することにした。

二、略年譜

華岡青洲の年譜は、呉のそれを訂正追補した森らの詳しいものがあるが、本解説に関連ある事項が抜けているので、それを加えて次に略年譜を掲げておく。



古稀寿像木版画（石原明氏蔵）

文政一〇年（一八二七）三月二五日入門の
本問玄調（棗軒）が自ら写した青洲の古稀寿
像を江戸の椿椿山に依頼し描かせた画像を木
版に刻し、玄調の塾生に頒ち与えたことが玄調
の識文（安政三年、一八五六）から知れる。



華岡青洲の古稀寿像（部分）（宗田一蔵）

よく知られている青洲の画像は、丹波長續（素後、号は成章堂）が描いた青洲の古稀寿像を原画とする系統のもので、この坐像は門人に頒ち与えたので門人の子孫の家に伝えられ、かなりの数が現存している。賛は青洲筆のものや華岡南洋筆のもの、あるいは無賛のもの等各種が知られる。

掲示の画像は『門人姓名録』に記す文政五年（一八二二）五月十一日入門の京都高倉錦小路上ル増田仁泰の子孫の家に伝えられたもの。

この画像にみえる十徳（羽織）と袴には手術時褌がけし易いよう紐を結紮輪状に縫いつけてあり、家紋がないので正装ではない。

年 号		年 齡	事 蹟	入門者数	三 都 の 動 向
天和 三	一六八三		祖父・雲仙尚政（初代随賢）生まる		
享保 七	一七二二		父・直道（二代随賢）生まる		
元文 元	一七三六		母・於繼（松本家）生まる		
宝暦 四	一七五四		十月二十三日華岡青洲（三代随賢）生まる		閏二月七日山脇東洋、京都六角獄舎鞠問所前にて男屍観臓
一二	一七六二	三	夫人・加恵（妹背家）生まる		
明和 四	一七六七	八			伊良子光顕『外科訓蒙図彙』刊
六	一七六九	一〇	祖父・雲仙尚政没（88）		

四	三	天明 二	九	八	七	三	安永	八
							二	
							一七七三	
一七八四	一七八三	一七八二	一七八〇	一七七九	一七七八	一七七四		一七七一
二五	二四	二三	二一	二〇	一九	一五	一四	一二
末弟・良平(鹿城)生まる 青洲、京都に遊学								

一 | | | 一

十二月廿五日。山脇東門、 婦屍觀臟、花井仙臟参加、 中川修亭生まる	杉田玄白ら『解体約図』刊	杉田玄白ら『解体新書』刊	一月七日齋静齋(花井・ 大西の師)没	大和見水(見立の養父)没	大西晴信、花井忠実(仙 藏、字孟一、号十洲)の 遺著『傷寒論微辞弁』刊	桃谷華洲没	小石元俊ら、伏見にて平 次郎解剖	この年、大和見立三三五歳、
---	--------------	--------------	-----------------------	--------------	---	-------	---------------------	---------------

寛政								
七	六	五	四	三	二	元	八	五
一七九五	一七九四	一七九三	一七九二	一七九一	一七九〇	一七八九	一七八八	一七八五
三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二六
青洲上洛、製薬等勉強		松浦耕輔訪問	十二月廿一日中川修亭と 妹・於勝没	九月『丸散便覧』を著わす 中川修亭の協力で『禁方 録』『禁方拾録』を編す			六月父・直道没(64) 中川修亭(18)寄留	二月青洲帰郷
一	二	二	一	二	一	一	一	一
岡山忠孝没	山田静斎没	鎌田玄台生まる	南涯へ入門か	この頃、中川修亭、吉益	鈴木蘭園没	芝蘭堂へ入門	橋本宗吉、江戸大槻玄沢	京都大火
							夏、杉田玄白上洛	十月大槻玄沢上洛
							光顕四八歳	吉益南涯三五歳、伊良子

八	一七九六	三七	中川修亭『麻薬考』序文 に青洲の麻酔薬研究言及	三
九	一七九七	三八	養子・準平（南洋）奥家 に生まる	一
一〇	一七九八	三九	長女・小弁没	四
一一	一七九九	四〇	母・於継没（64）	五
一二	一八〇〇	四一		一
元	一八〇一	四二	長男・雲平（葛城）生まる	二
二	一八〇二	四三	青洲、紀州藩に召され、 士分に列し帯刀を許さる	二
三	一八〇三	四四		七
			前野良沢没（81）	
			大坂・岩永栄安没、京都 ・岩永文恭大坂へ移住 家督相続 宇田川玄随没（43）	
			二月一三日三雲施薬院ら 男屍解剖 伊良子光顕没（62） 吉雄耕牛没（77） 大矢尚齊、伏屋素狄、各 務文献ら、大坂葭島で女 屍解剖、生理実験実施	

文化 元	二	三	四	五	六	七	八	一〇	文政 元	二
一八〇四	一八〇五	一八〇六	一八〇七	一八〇八	一八〇九	一八一〇	一八一	一八一三	一八一八	一八一九
四五	四六	四七	四八	四九	五〇	五一	五二	五四	五九	六〇
青洲、一〇月一三日全身 麻酔下乳癌手術に成功 九月妹・小陸没(42)	一	一四	四	一〇	二六	一六	四一	四五	以下合水 堂を含む (五二)	青洲、紀州藩小普請医師 となる (四二)
伏屋素狄『和蘭医話』刊				二宮彦可『正骨範』刊 小石元俊没(66)	桂川甫周没(59)	海上随鷗没(54)	吉益南涯没(64)		朝倉荊山没 各務文献没(65)	

三、学統

六	一八二三	六四	末弟・良平(鹿城)没(49)	(四七)	シーボルト来朝
一〇	一八二七	六八	本間玄調(棗軒)入門	(四一)	大槻玄沢没(71)
一二	一八二九	七〇	夫人・加恵没(68)	(二五)	大和見立没(78)
天保 三	一八三二	七三	熱田玄庵入門	(四〇)	シーボルト離日
四	一八三三	七四	長子・雲平(葛城)没(32)		各務文献『整骨新書』刊
			大和見水入門		
			弟・治兵衛没(68)	(二六)	
			青洲、紀州藩奥医師格と なる		
六	一八三五	七六	青洲、一〇月二日没 (天聴院聖哲直幸居士)	(二四)	